



2023年（令和5年）
7月号（No. 938）

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

令和5年度通常総会を開催 橋本しをり・第27代会長を選出

6月24日、日本山岳会令和5年度通常総会が東京・四谷の主婦会館・プラザエフで開催された。「令和4年度事業報告」「令和4年度決算報告」「令和5・6年度役員選任の件」を審議、いずれも原案どおり可決・承認された。また、総会後に開かれた臨時理事会で次期会長に橋本しをりを会員を選出、本会初の女性会長誕生となった。

令和2年度から3年間、新型コロナウイルス感染症の影響を受けオンラインが主たる形で総会が開催されてきたが、今年度は会場出席を主たるものとした従来の方法で開催でき、会場には役員15名のほか82名の会員、合計97名が出席した。また、同時にオンライン配信も行なった。

■古野淳会長の挨拶

総会冒頭に、今年で任期満了退任となる古野淳^{きよ}会長から挨拶があった。最初、久しぶりにこれだけ大勢の会員が一堂に会して総会を開催できることを嬉しく思う、と話した。続いて、これまでコロナ禍の間、登山にも不自由があったことは、戦時中以来のことではないかと。また、それが登山者の心身に与えた影響は計り知れなく、

目次

令和5年度通常総会を開催 橋本しをり・第27代会長を選出 …1	
創立120周年への取り組みと さらなる100年に向けて ……4	
日本山岳会会長就任にあたって …5	
支部長が代りました ……6	
約250名が参加して 第77回ウェストン祭を開催 ……8	
連載■ご当地アルプス登山案内 ⑦紀泉アルプス ……10	
⑧加美アルプス ……11	
東西南北 ……13	
活動報告 科学委員会 ……15	
新入会員 ……15	
図書紹介 ……16	
会務報告 ……17	
ルーム日誌 ……18	
会員異動 ……18	
INFORMATION ……19	
編集後記 ……19	

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月～金 ……10～20時
第1、第3、第5土曜日 ……10～18時
第2、第4土曜日 ……閉室

当会にとっても深刻だったと述べた。しかしながら、令和4年度後半からは徐々に登山活動や会の活動も再開でき、年次晩餐会も行なえたことも喜ばしかった。

また、創立当時からのパイオニア精神や、日本の恵まれた自然の中で活動してきた先人たちの知恵や行為こそ、今後の日本山岳会のあり方に大きな影響を与え続けるだろう、と述べた。その中には、山岳会の知性とも言える出版事業や図書室を重要な財産として維持すること、海外登山や若年層の育成、上高地山岳研究所の維持管理なども含まれることを述べた。

また、創立120周年記念事業の一つである全国山岳古道調査は、日本の山暮らしや登山の歴史をたどる貴重な事業であること、支部

が中心に活動する各地の山岳祭は貴重な歴史や山岳文化を継承するものであること、人生百年時代とにかくに健康寿命を長く保つか、登山を医療面からアプローチする事業なども重要だ、と話した。

山に登りたい、自然に親しみたいという本来的な想いこそが日本山岳会の根幹を支えるものであり、登山という質の高い趣味は、生涯にわたって楽しめるものであること、を述べた。最後に、この日の総会を境に、新理事会に代替わりして新たなスタートを切るが、今後とも会員の協力をお願いしたいと話し、挨拶を締めくくった。

《審議事項》

■令和4年度事業報告(案)・決算報告(案)の承認(第1号議案・第



久しぶりに約100名の会員が出席した総会会場

2号議案

初めに長島泰博・総務担当理事より、総会出席者は97名、委任状提出者は530名、議決権行使書提出者は1958名、合計2583名となり、現在の会員数4221名の過半数を上回る61%に当たるため、今年度の総会は有効に成立する、という報告がされた。

また、議事録署名名人については古野議長に一任され、小林敏博会員(15938)と鈴木孝幸会員(16806)の2名に依頼され、議案審議を開始した。

令和4年度事業報告は柏澄子・総務担当常務理事より、同年度決算報告は南久松宏光・常務理事よ

り説明があり、最後に黒川恵監事より、全ての事業と決算について監査を終えた旨、報告があった。

【事業報告】

令和2年度から続いた新型コロナウイルス感染症拡大による行動制限が、令和4年度半ばから徐々に解かれ、これに伴い本部、支部委員会、同好会それぞれの活動が再開され、活発化してきた。なかでも喜ばしかったのは、2年間対面での開催ができず、オンライン開催を余儀なくされていた年次晩餐会を再開できたことである。また、年次晩餐会に先駆け、秩父宮記念山岳賞の授賞式と、受賞者である「新宮山彦くろーぶ」の講演や、海外登山助成の隊である東海支部のマナスル・ワンデイトライや、広島支部のアマ・ダブラム、120周年記念事業の一つであるヒマラヤキャンプによる未踏峰ブンギ登山に関する講演もあった。

令和4年度の事業については、「I登山振興事業」「II山岳研究調査事業」「III山岳環境保全事業について」「IV会員向け事業」に分けて、それぞれ説明があった。

【決算報告】

【決算概況】

令和4年度においても会員数減少に歯止めがかからず、会費収入の減少が続いた。一方、新型コロナウイルス感染症患者の減少を受けて創立120周年記念事業などの活動再開に伴い、事業費は前年度を上回ることとなった。その結果、前年度に続き経常損益は525万円の赤字決算となった。

一般正味財産増減の部では、経常収益が8826万円で、対前年度比2270万円の大幅増。経常費用は9351万円となり、こちらも対前年度比2266万円の増加となった。120周年記念事業寄附金や事業収益は増えたが、ほぼ同額の事業経費が増え、赤字の縮減ができなかった。

指定正味財産増減の部には、寄附者により次年度以降に利用することが指定されている120周年記念事業のヒマラヤキャンプなどの寄附金700万円を計上している。本年度に発生した事業に充てるための61万円を振替えた結果、639万円の増加となった。

【収益の推移】

当年度における正会員数の純減は116名である。継続して会員増加に努めているが、新規入会者

を獲得しても退会者が多い状況は改善できなかった。このため受取会費は4512万円となり、前年度比164万円の減少となった。

事業収益は山研の利用収益が回復し、年次晩餐会の開催も実現できたことなどにより前年度比810万円増の1106万円となった。寄附金については指定正味財産増減の部に計上されているものを含め2290万円となった。

【事業費および管理費の推移】

事業費および管理費については総額で9351万円となり、対前年度比32%の増加となった。コロナ禍が収束の様相を見せ、支部・委員会とも事業実施に努力し、公益事業についても可能なものから活動を再開した。120周年記念事業も、延期されていたグレート・ヒマラヤ・トラバースなどが実施できた。費目別では減少していた会議費、旅費交通費、支払手数料などが増加してきている。

事業管理費および管理費間接費は、経費削減に極力努めたが、2469万円と対前年度比278万円の増加となった。

■令和5・6年度役員(案)選任の件(第3号議案)

次の理事候補者、監事候補者が
選任された。

【理事候補者】

〈再任〉橋本しをり(9295)、松田宏也(11748)、平川陽一郎(12427)、久保田賢次(13011)、川瀬恵一(14424)、長島泰博(15418)、南久松宏光(16785)

〈新任〉桐生恒治(7675)、飯田肇(9440)、永田弘太郎(12319)、池田功(16139)、望月賢司(16229)、原田智紀(17095)、猿渡良太郎(17116)

【監事候補者】

〈再任〉佐野忠則(12887)
〈新任〉石川一樹(11022)



今年度で一部退任となる古野会長ら執行部

《報告事項》

■令和5年度事業計画・予算案

令和5年度は、公益社団法人に移行して12年目となるが、令和7年度に迎える創立120周年まで残すところ3年となった。また、コロナ禍の影響も少なくなり、本格的に登山や会の活動を進められる状況と考えている。今年度は、次の4つを基本方針として活動していく計画であることが述べられた。

【事業計画基本方針】

- (1) 会員数の維持
- (2) 支部活動の活発化
- (3) 若手会員の活動の活発化
- (4) 創立120周年記念事業の推進

■質疑応答

これらの議事と報告を受け、会場からは以下の質問があった。

・ 依屋守男会員(9742)

高尾の森づくりの会は、なぜ理事会の直轄なのか。

・ 吉川正幸会員(7345)

高尾の森づくりの会の前代表であるので発言する。本会の支部ではなく、23年前に自然保護委員会の委員を中心に創立された団体なので、常務理事会の下にある組織になっている。今では高尾の森づくりの会員のうち本会会員は20%以下となっている。

くりの会員のうち本会会員は20%以下となっている。

・ 皆川陽一会員(14030)

第2号議案を否とする。収入が少ないから会員を集めるのは本末転倒であり、行事を減らすべき。

・ 南久松宏光常務理事

それも一つの考え方であるが、行事をなくしても節約できるわけでもなく、長年の歴史上必要とされる行事もあり、なくしたら良いというわけでもない。適正な会員数が必要と考える。

・ 吉井英生会員(15655)

山研の小規模水力発電の発電機の規模と、自家発電としてのみ使っているのか、あるいは中部電力に売断することはできないのか。

・ 古野淳会長

1kwの出力であり、台風や大雨で発電できないときもあり、安定はしない。

・ 森武昭会員(9620)

管轄の環境省にも相談したが、現在は研究として認可を受けており、営業目的のことはできない。現在の規模で売れる量を鑑みても、新たな許認可を取るには足りないという結論を出した。

・ 渡邊雄二会員(7914)

日本・エクアドル外交関係樹立100周年記念友合同登山について、進捗状況の説明があった。

最後に創立120周年記念事業の報告と今後の計画について、担当の飯田邦幸理事から説明があった。また、群馬支部の根井康雄支部長から、9月に開催される全国支部懇談会の案内があった。

《臨時理事会》

総会後、別室にて新役員による臨時理事会を開催、役員の互選により会長、副会長、常務理事が選出され、各役員の担当についても決議された。会長は橋本しをり会員、副会長は永田弘太郎、桐生恒治、飯田肇会員。総務担当常務理事は長島泰博会員、財務担当常務理事は南久松宏光会員が継続、平川陽一郎会員も常務理事となった。

《懇親会》

70名の参加があり、前役員と新役員の挨拶があった。橋本しをり新会長からも就任にあたって挨拶があり、自身とJACとの出会いのエピソードなども披露された。

(報告) 南久松宏光、柏澄子 写真 奥田有恒

創立120周年への取り組みと さらなる100年に向けて

会員番号12194 古野 淳

2020年に始まったパンデミックによる登山制約は、会員個人の登山や山岳会の行事にも制限がかかれ、年次晩餐会も2年連続中止となつて苦しい期間を過ごしました。社会活動の不活性化は、経済活動だけでなく精神面、体力面においてもダメージも大きかったと想像します。22年度の後半からは委員会活動を再開し、支部間交流や3年ぶりの年次晩餐会で再会できた会員の皆さんの笑顔は、実に印象的でした。

21、22年度の決算は、2期連続の赤字でした。固定費はほぼ変化のないまま、入会者減少と退会者増加により財務が悪化しています。手遅れになる前に、財務改善の知



古野 淳前会長

恵を絞る必要があります。具体的には経費節減、入会促進、止まり木の活動、寄附の呼び掛け、会費値上げなども考えられますが、現実的には会員を増やして、退会者を減らす努力を地道に続けていくことが効果的な方法であると考えます。首都圏には支部に所属していない会員が1000人以上おられますので、委員会や同好会活動を活性化して、会員サービスを充実させていく以外、近道はないように思われます。

かつて日本山岳会が実績を残したヒマラヤ高峰の初登頂、初登攀は、もはや組織で挑む対象ではありません。時代は大きく変わり、将来の日本山岳会の存在意義、新たなパイオニア・ワークは何か。創立120周年記念で取り組んでいる事業が、JACのこれからの100年の方向性を示唆していると思います。

海外登山研究…登山史や科学的視線の海外登山研究は、JACには膨大な知識・知恵の蓄積があり、

これからも重要な文化活動として社会に貢献していける財産です。出版事業と図書室はJACの精神でもあり、資料のデジタル化を進めていく必要があります。

全国山岳古道調査…日本の登山文化・歴史を紐解いて、33支部の総力を結集して踏破・研究する活動は社会的文化活動と言えます。

若年層の登山活動…会員のサポートをお願いします。これまで山の恵みを受受してきた私たちがバトンを渡す「恩送り」。英国山岳会ほか海外の山岳会でも、最も力を入れて活動の一つです。

引き継がれる山岳祭…地方ならではの山岳文化や特徴的な地理を活かした質の高い山岳文化活動で、地域の人々との交流を通じて支部の活性化が期待できます。

人生百年時代の安全登山…心身両面の健康を促進し、高齢になっても健康寿命を上げていけることを、JACが全国民に向けてアピールできる可能性があります。

上高地山岳研究所…中部山岳国立公園の特別保護地区内にある「山研」。創立当初の歴史的な登山や自然保護の芽を育てた場所、これからも永く維持、活用してい

くべき重要な施設です。

登山人口…「レジャー白書」によりますと、09年の登山人口1230万人のピークから、20年は460万人と、パンデミックの影響もあって大きく減少しましたが、徐々に戻っているという実感はあります。老若男女、多くの方々に会員になっていただき、健康で楽しい人生を全うするための材料を提供できるのもJACだろうと思います。

子どもたちの野外活動…登山には遭難のリスクがつきまといます。自然の中で困難な場面に遭遇したときこそ、事前の準備がその判断に活かされます。学校登山が衰退する厳しい現実のなかで、子どもたちにこれからの長い人生で大切なものを、自然の中で体験させてあげたいと強く思います。実際に山で出会う人たちを見ると、若年層登山者が確実に増えています。求める生活の質が変わり、自然回帰の傾向は、一時のブームではないように思われます。

遭難防止…JACの重要な役割です。同じ場所、同じ原因の遭難が跡を絶ちません。登山前の情報収集が遭難のリスクを下げてくれ

ます。スマホを携帯して登山に出掛ける方がほとんどだと思います。AIなどのデジタル技術の進歩は著しいものがありますが、気象情報やGPS情報ほか、過去の登山

日本山岳会会長就任にあたって

会員番号9295 橋本しをり

このたび日本山岳会会長を拝命いたしました橋本しをりでございます。歴史ある日本山岳会の会長就任にあたって、身の引き締まる思いであります。

私と日本山岳会との出会いは、東京女子医科大学の山岳部に在籍していた学生のころにまで遡ります。当時、JAC学生部の部長をされていた早稲田大学山岳部の竹中昇さんから、女子部創設について仰せつかりました。また、ナンダ・デヴィ登山隊(1976年、渡

記録、遭難記録が遭難を減らす方法になります。登山届はスマホから簡単に県警などに提出することができそうですので、ぜひご協力をお願いしたいと思います。

辺兵力総隊長、鹿野勝彦隊長の事務局のお手伝いをさせていただき、遠征登山隊の基礎を学ぶことができました。

その後、女子登山隊としてガッツシャールムⅡ峰(1988年、日本女子登山隊隊長)、チョー・ユー(2002年、日中友好チョー・オユー女子合同登山隊・日本隊隊長)、チョモランマ(2005年、日中友好チョモランマ女子合同医学登山隊・日本隊隊長)などで海外遠征を経験しました。その過程で、脈波測定による末梢循環や高所頭痛に関する医学研究を行ないました。

さて、日本山岳会は1905年、明治38年に設立された日本最初の山岳クラブで、再来年の2025年には創立120周年を迎えます。世界的にThe Japanese Alpine

Club(JAC)として知られ、現在約4500名の会員が活動を行なっています。

長い歴史の中で、会員による初登頂・初縦走・初踏破は枚挙に暇がありません。また、日本山岳会の活動は広範で多岐にわたり、24の委員会のもと登山・アルピニズムの振興、山岳文化の継承、自然環境の保全、国際交流などの活動が行なわれています。

なお、日本山岳会のカルチャーとしての特徴は、創立以来、ボランティア精神で成り立っていることが挙げられます。山に関わる様々な分野で活躍する会員同士が自由な雰囲気の中で登山を楽しみ、交流し、山岳事業活動や山岳文化、自然保護活動を行なっています。

近年、2016年の「山の旦」祝日制定に伴い、登山ブームが再来しています。登山は適度な有酸素運動であるのみならず、荷物を背負い山道を登り降りすることで筋力トレーニングの効果もあります。また、日本百名山達成などモチベーションの維持が可能です。さらに森林浴や植物や山の景観を楽しむことによるリラククス効果なども期待でき、国民の健康維持のため

の有力なエクササイズの一つと言えます。一方、遭難を含む山岳事故には十分注意する必要があります。また、高齢化社会の到来を迎え、特に高齢者が安全な登山を行なうための問題点の解決も必要です。

今後の抱負として、日本山岳会が100年以上にわたり積み上げてきた山岳文化の財産は膨大なものであり、その創立以来の精神と発展の歴史に学ぶとともに、現代の登山環境に合わせながら少しずつ変化させ、順応し、新しい時代の登山文化創造と充実したクラブライフの環境づくりに、微力ながら全力を尽くす所存でございます。

また、女性会員のサポートや、若いZ世代の登山への意識を向上してもらうためのITによる情報発信、SDGsに代表される環境問題への取り組みも重要になってくると思います。

最後になりますが、2025年の創立120周年に向けて、会員の皆様とともに日本山岳会の発展に努めたいと思います。皆様におかれましては、引き続きご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



橋本しをり新会長

支部長が代りました

北海道支部長 黒川伸一さん

本州の大学で1年生だったころの3月、山岳部の春山合宿山行で初めて津軽海峡を渡り、先輩たちに連れられ1839峰をアタックした。蛇のように白くうねる日高山脈の光景に圧倒された。稜線上で風に吹き飛ばされそうなテントでポールを押さえながら一夜を明かしたことは、今も鮮明に記憶に残る。

何より下山後に無銭旅行に近い形で北海道を放浪し、いろいろな人や土地と遭遇したことが大きかった。その後3回、北海道行を重ね、道内の会社に就職し、今日に至っている。

緯度が高い北海道の山は、本州以南の山に比べて難易度が高いと実感している。北海道支部では2007年11月、上ホロカメットク



北海道支部長 黒川伸一さん

山における雪崩遭難で4人の仲間を失うなど、苦い経験をしている。その教訓を活かすべく、とりわけ支部としては雪崩対策に力を入れてきた。

支部には現在、会員、準会員、支部会友合わせて200人余りが在籍している。安全に、楽しく、有意義に、山や自然の中で過ごしたい、互いに技術や知識を学び合いたい。支部がそのためのきつかけづくりや、同好の人同士の接点になる場であればいい、と考えている。

初任地・函館時代に知己を得た前支部長・藤木俊三さんから、支部の舵取り役のバトンを受けた。日本山岳会は古い山岳会だが、支部レベルでできる限り新たな発想、視点を取り入れ、皆さんにとって居心地が良く、使い勝手の良い集まりでありたいと思う。

遅れていた日高山脈の国立公園化が来年に実現することが6月、発表された。日高に限らず北海道には素敵な山が多い。支部の活動を通じて、すばらしい山々をもう少し深掘りしたい。多くの皆さんに知恵を貸していただければありがたい。

越後支部長 後藤正弘さん

私は妙高山麓に生まれ育ちましたが、なぜか初登山は尾瀬・至仏山(1973年6月)でした。それからちようど半世紀、山登りを続けてきました。

高校3年(69年8月・9日間)の能登半島サイクリングと翌春(70年3月・17日間)の九州一周無銭旅行の感動から登山に興味を持ち、74年6月に地元の社会人山岳会へ入会しました。

このころ日本は高度成長期であり、社会生活が急激に変化した時代です。登山用具の国産化、自家用車普及と道路などインフラ整備やスキー場開発などが急激に進み、労働者の賃金や休暇が増えたことで登山の大衆化が一気に加速しました。登山の世界でも剣や穂高、谷

川の岩場以外の未開拓の岩壁に目が向けられ、高度が低くともパイ



越後支部長 後藤正弘さん

オニア・ワークを目指す風潮が強く、地方山岳会でも地域研究とともに手つかずの領域に魅力を感じました。

次第に岩登りや沢登り、冬山などのバリエーション・ルートに傾倒し、明星山南壁や海谷山塊、頸城三山、戸隠山など頸城エリアで活動を展開しました。結婚を機に一時、山行日数が激減しましたが、山スキーや縦走、沢登りなどを再開し、現在は里山巡りを含め四季を通して生活の中に山があります。

日本山岳会への入会は、頸城山地の登山史や地域研究に造詣が深かった某会員の影響から、2005年4月に入会しました。ここ10年ほど越後支部の役員を務め、いちばんの命題である支部の活性化に取り組んでいます。

私の任務は、これまで先輩が創り上げてきた登山文化の継承と次世代会員の育成です。近年、支部の活動も活発になってきましたが、さらに組織的に拡大することが必要です。会員の皆さんからの知恵をいただきながら活動し、一緒に考えることで一步一步進めていきたいと思います。

支部長が代りました

岐阜支部長 東明裕さん

岐阜支部の新たな支部長に就任した東明裕（とうめいよ）と申します。初代支部長の今西錦司先生から始まる、誇り高きこの役職を引き継げることで、そして、皆様とともに岐阜の山々の魅力を追求できることを光栄に思います。

岐阜の山と言えば、多くの方が笠・穂高・槍を思い浮かべることでしよう。しかし、私たちの拠点である岐阜市は、町の中心に位置する岐阜城を有する金華山と、その麓を流れる清流・長良川の美しい風景に囲まれた濃尾平野に位置します。

私の登山の道は、小学生のころに毎週末、自転車を通ったこの金華山から始まりました。今でも私のトレーニングの中心は金華山であり、周辺の「ぎふ百山」や北ア・



岐阜支部長 東明裕さん

中ア・南ア・八ヶ岳・鈴鹿・両白山地を巡り、山々の恩寵を日々感じていきます。

岐阜県には海がないため、私たちの生活は山と密接につながっています。年齢や性別、登山の経験にかかわらず、私たちはなんらかの恩恵を山から受けています。登山界の変容とともに多様化が進む岐阜支部において、私たちはこれらの恩恵を全ての会員が共有できるように組織づくりと、それを後押しする活動の実践を目指しています。

また、私たちは公益事業を通じて、岐阜の山と自然を愛する全ての人たちとともに、山と自然とのより良い関わり方を模索し、その魅力を広く伝えていきたいと考えています。このような企画の充実化を進めることで、私たちのコミュニティがより豊かになると考えています。

岐阜支部として、今後も支部の一層の発展と皆様の期待に応えるべく様々な活動に取り組んで参る所存です。なにとぞ今後とも変わらぬご支援とご鞭撻、ご協力を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

関西支部長 水谷透さん

私は大阪市内で生まれ、山とは全く縁のない環境で育ちました。中学生のころから独り旅をするようになりましたが、名所旧跡を巡る物見遊山の旅から自然の中へ入り込む旅へと変化しました。そうしたなかで、高校2年生のときに社会人山岳会に入り、本格的に山に登るようになりました。

学生時代は京都で過ごすことが多く、比良山系から琵琶湖の向こうに見える湖北や奥美濃の山々に足繁く通うようになりました。地形図を手に道のない山を、雪稜や沢をたどり、ときにはヤブを漕いで歩くことが楽しみでした。最近では、これらのほとんどの山に道が付けられており、残念ではありませんが……。

日本山岳会に入会してからは海外の山へも足を向けるようになり、



関西支部長 水谷透さん

現在まで14座に足を運びました。仕事を辞めてからの最近10年余りは、年に1〜2回、1週間ほど定宿に滞在して西上州の山々を巡るなどしております。

また、入会した翌年から、委員・役員として支部の運営に携わって参りました。そうしたなかで支部長として推挙され、就任することとなりました。

さて、関西支部は2025年に支部設立90周年を迎えます。すでに一昨年より記念事業の一部はスタートしており、再来年には全国支部懇談会に併せ記念式典も計画しております。新支部長として、これらの事業を滞りなく進めていくことが最大の課題であります。

また、前支部長時代には支部行事の数が大きく増え、若手の会員も増えて参りました。昨年度の場合、行事数は201件（講演会・会合など30回、山行79回、自然保護行事57回、登山教室35回）と、かつてないほどに上っております。これに伴い必然的に必要経費も増え、人材不足にも陥っております。人材育成と財政改善が、もう一つの大きな課題としてのしかかっております。

支部長が代りました

北九州支部長 竹本正幸さん

私は1949年生まれの74歳です。18歳から60歳までは、大阪の堺市に在住していました。

山は社会人になってから、企業内の山岳同好会に入会しました。同好会というのでハイキング程度とっていただけでもないことで、春は剣や穂高での合宿、夏は前穂東壁や屏風岩、秋は沢登り、冬は鹿島槍ヶ岳と鍛えられました。海外遠征は72年、23歳のときに大阪府山岳連盟主催のアラスカ遠征（ランゲル山群ナベスナ氷河東部）に参加したのが初めてです。

そして76年、山岳同好会創立10周年記念では、アラスカのマウン・ト・ヘイズ南峰（4055m）に南西稜より挑戦、登頂しました。定年を機に福岡県の実家に帰り、日本山岳会に入会しました。



北九州支部長 竹本正幸さん

当支部もほかの支部と同様、多くの課題を抱えています。今までの方法ではなかなか会員が増えず、辞めていく人も多い。魅力ある山岳会にするため皆で考え、改革していく必要があります。環境ボランティアや花散策、地形・地質のブラタモリの登山など、幅広い活動で楽しい登山を計画中です。

その一方、スポーツ・クライミングや沢登り、バリエーション・ルートに行きたいという人もいますが、指導者の高齢化で対応できていないのが実状です。個人山行なども含めて、安全登山を進めるうえで、自立した登山者の育成が大事かと思っています。

また、次世代の入会を進めるとともに、高齢者も人生100年代に対応して「90代でも登っているよ」と言える人がいても良いと思います。北九州支部では、高齢者対象の「ポレポレ山行」を毎月計画しています。日本には体力に依拠して登れる山がたくさんあります。体力維持に努力して、仲間とともにいつまでも山と関わっていたいと思います。支部の皆様と協力して、支部活性化のために全力を尽くすつもりです。

REPORT

約250名が参加して 第77回ウエストン祭を開催

信濃支部 古幡開太郎

6月2日、北上する台風2号の影響で中部地方は大雨となり、午後1時過ぎ、上高地へのバス路線がストップしました。ウエストン祭を3・4日に控え、支部長はじめ事務局は一刻も早い天気回復を祈るばかりでした。

その甲斐あって3日早朝に雨は上がり、上高地へのバス路線も再開しました。東京や名古屋から参加された会員は、中央線が不通となったため高速バスに乗り換えるなどして記念山行に参加されました。LINEなど情報網の効果に驚きました。



献花してくれた内木和花さんと大膳つばささん

【徳本峠記念山行】

かつては、島々宿で午前6時に出発式を行なって徳本峠を越えて上高地に入り、翌日、碑前祭を迎えましたが、台風や豪雨により島々谷が荒れたところにコロナ禍が加わり、しばらく記念山行は中止していました。しかし、昨年からルートを明神から徳本峠往復の山行に切り替え、実施しています。今年は信濃支部員17名、安曇小学校児童とご家族約60名が参加し、実施されました。残雪が少なく、二リンソウも見頃を過ぎていました。が、快晴の下、前穂を見ながら楽しい山行となりました。

【碑前祭】

6月4日午前10時、上高地ウエストン広場には多くの人が集まり、碑前祭が始まりました。開会に先立って日本山岳会信濃支部・東英樹支部長が挨拶し、協賛者への感謝の後、ウォルター・ウエストン



イベント終了後、ウェストン広場にて関係者一同で記念撮影

師の業績と、島々谷の登山道が環境省と長野県により改修が進み、来年は記念山行ができることが報告されました。恒例の支部長の歌は「穂高ダンチヨネ節」、会場が一気に和みました。続いて松本市安曇小学校児童によりウェストン師碑への献花・献歌が行なわれ、子どもたちの澄み切った歌声が広場に響きました。

黙祷を捧げた後、主催者である日本山岳会・古野淳会長が挨拶されました。古野会長はウェストン祭が77回続けられていることを慶び、100回へと続くことを願われました。また、NHKの朝ドラ

で話題の牧野富太郎が奥穂高岳に登り、コマクサなど数々の高山植物を命名していることなどを紹介された後、ウェストン師との交流により日本山岳会を創設し、初代会長を務めた小島烏水名誉会長の孫で、四国支部の相良泰子さんのご家族が今回参加されていることを紹介していただきました。

引き続き信濃支部第2代支部長・尾崎喜八が、ウェストン祭で初めて詠み、自ら朗読した(第12回、1958年6月15日)「上高地にて」を信濃支部・小祝慶子会員が朗読した後、ウェストン祭最大の協賛者である地元松本市の臥雲義尚市長のメッセージを嵯峨宏一副市長が代読されました。

【記念講演】

毎回恒例の記念講演は、雑誌『山と溪谷』の元編集長で日本山岳会の機関誌『山岳』編集委員長を務められている神長幹雄さんが「晩年

にお会いしたJACの2人の先駆者」と題し、今西錦司と横有恒について講演されました。

京都・西陣の織物問屋出身の今西錦司は、卓越したリーダーシップでパイオニア・ワークを行なった人で、人を育てることが上手い人でもありました。梅棹忠夫、川喜田二郎、中尾佐助、伊谷純一郎ら第一線で活躍した人を訓練し、育てています。京都大学山岳部出身の今西錦司はヒマラヤにこそが、戦後の1952年、西堀榮三郎をネパールに派遣しマナスルの登山許可を取りましたが、その後、その許可をあっさり日本山岳会に委譲します。

マナスル第1次隊長は松方三郎が務めました。第3次隊長は断り続けた横有恒が引き受け、56年マナスル初登頂を果たします。横は、京都大学出身の今西寿雄を登頂者に据え、今西錦司に花を持たせました。

慶應義塾大学山岳部出身の横は21年、アイガー・東山稜ミッテルレギを初登攀した人です。横は登頂の2年前、ヨーロッパに行つてウェストン師に会い、指導を受けて東山稜初登攀を果たします。その

ときアイガー山麓のグリーンデルワルト村の人々は、花火を上げて歓んだそうです。おふたりにはこんなつながりがあつたことに改めて驚かされましたが、山の良さは「人が人を創ること、人と人とのつながりです」と語り、講演を終わりました。

碑前祭終了後、来賓や上高地関係者および信濃支部員が本部(上高地アルペンホテル)に集まり、感謝と反省会を合わせた午餐会が行なわれました。午餐会はウェストン祭の後、毎行行なわれる恒例の行事で、上高地を管理する関係機関の代表の方々からご挨拶をいただいた後、1皿の酒肴とカレー1杯で終了する簡素な会です。今年は60名が参加し、ウェストン祭を締めました。

◆参加者…約250名のうち来賓15名、信濃支部員37名

◆記念品…手ぬぐい「西鎌尾根からの槍ヶ岳」ブローチ「ミヤマザクラ」

◆ウェストン祭および特別講演はYouTubeで視聴できます。

◆記念品をお求めの方は、古幡開太郎まで。VEU00522@nifty.ne.jp(信濃支部ウェストン祭実行委員長)

連載■で当地アルプス登山案内37

紀泉アルプス

大阪・和歌山府県境に横たわる和泉山脈の西部、雲山^{うんさん}峰を中心としたエリアを「紀泉アルプス」と呼んでいる。

戦前、近畿の登山案内のバイブル的な存在である『近畿の山と谷』（住友山岳会、明文堂）の新版（昭和16年刊）には、「最近、阪和電鉄によつて和泉アルプスと銘を打ち、雲山峰縦走のハイキング・コースが拓かれた」とある。続いて「もとより山気分というようなのは望むべくもない」と、評価は辛辣だ。

関西支部 加藤芳樹

阪和電鉄は、現在のJR阪和線の前身となった鉄道会社である。関西では、古くから鉄道会社による登山およびハイキング・コースの開発がなされてきたが、その流れのなかで整備され、登山者を惹き付ける名称として「アルプス」を用いたのだろう。

一方、同年出版の『近畿の山々と史跡巡り』（藤田元春、成象堂）では、現在の名称、紀泉アルプスとしてガイド文を掲載しており「日本アルプスほどの高山性を欠くが、岩塊の尾根伝いに紀伊の重畳たる連嶺を眺め乍ら行く景観は将に日本アルプスに彷彿たるものがあり」と、やや大仰ながら評価は上々だ。著者がそれぞれ探検・冒険的な登山をする山岳会と地理学者とい

うことで、山に対するスタンスの違いからだろうか、その評価の違いが面白い。

さて、紀泉アルプスとはどこを指すのかということだが、両社とも案内は山中^{やまなか}溪駅から雲山峰を越えて南下、墓ノ谷の行者道を経由して六十谷^{むそた}駅に下るコースを紹介しているのだ。阪和電鉄によるコース設定がそうなっていたのだろう。ここでは、それらに従ってコース紹介をする。

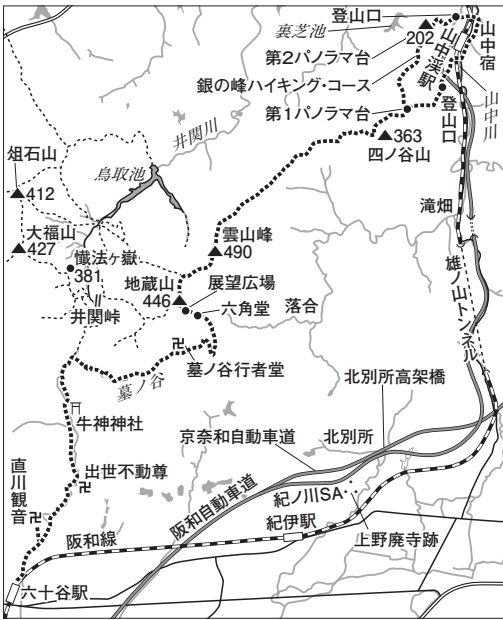
また、このエリアで押さえておきたいのは、役行者を祀る行者堂があることから分かるように、紀淡海峡の友ヶ島から大和川の亀の瀬に至る、葛城二十八宿と呼ばれる葛城修験の行場であるということだ（本会報の昨年9月号「葛城経塚調査を回顧する」を参照のこと）。そこを踏まえて歩けば、またひと味違う山歩きが楽しめることだろう。

【コースガイド】

登山道の取付は、山中溪駅から山中川を渡った南北に、銀の峰ハイキング・コースの登山口がある。どちらを選んでも良いが、山中は熊野街道の宿場町なので、少し散

策していきたい。本陣跡や熊野十九王子の一つ、馬目王子社などがある。

北から登ると、第2パノラマ台を経由する尾根道を歩くが、ここは樹木が育ち、パノラマ台というほど展望は期待できない。第1パノラマ台まで行くと、大阪湾の展望がすこぶる良い。南から登った場合は尾根道に合流して、少し北に下れば良い。第1パノラマ台からは南西へ、緩やかにアップダウンしながら尾根伝いに進んでいく。三角点のある四ノ谷山は尾根道を左に少し入った所にあるが、三角点があるだけなので、特に立ち寄りなくても良いだろう。



岩塊の尾根伝いに紀伊の重畳たる連嶺を眺め乍ら行く景観は将に日本アルプスに彷彿たるものがあり」と、やや大仰ながら評価は上々だ。著者がそれぞれ探検・冒険的な登山をする山岳会と地理学者とい



青年の森展望広場から遠望した紀ノ川の河口



地形図に「役ノ行者堂」とある墓ノ谷行者堂

尾根はおおむね樹林帯だが、送電線鉄塔が立つ前後はやや開けていて、アルプス風と言えなくもない。『近畿の山々と史跡巡り』では「岩塊の尾根伝い」という表現があるが、昭和初期は薪炭林として伐採が進み、樹木があまり生えていなかったのかもしれない。基本的には快適な樹林の尾根道が続く。

雲山峰山頂には石祠があり、「葛之峯 法華経譬喩品 第三ノ地」という石碑が建つ。葛城二十八宿第三経塚の意味だが、雲山峰の真西にある大福山も、第三経塚と伝わっている。

雲山峰から緩やかに下り、地藏山の肩で井関峠からの道を合わせ

ると、青年の森の展望広場に着く。ここからは紀ノ川の河口を一望でき、条件が良ければ四国も望める。さらに進んで東屋の六角堂を過ぎ、道標の「役ノ行者堂方面」へと下っていく。

荒れた涸れ沢になるとやがて墓ノ谷行者堂に着く。役小角の母、白専女とうめの墓所とも伝わり、親が子の将来の幸せを願う場所として信仰されている。ちなみに、さらに西にある高仙寺きょうせんじ（孝子観音）にも白専女の墓所がある。後は延々と林道を歩いて六十谷駅に向かうばかりだが、駅近くの本恵寺ほんゑい（直川観音）は役行者開基とされているので、立ち寄るとよからう。

【コースタイム】 山中溪駅（南コース）50分 第1パノラマ台（1時間40分）雲山峰（30分）青年の森展望広場（40分）墓ノ谷行者堂（1時間50分 六十谷駅）

【入・下山口へのアクセス】 行きはJR阪和線・山中溪駅、帰りは同じく六十谷駅

【参考文献・地図】 『週末の山登り関西周辺』、分県登山ガイド「大阪府の山」（いずれも山と溪谷社）国土地理院2万5000分の1地形図「岩出」「淡輪」

連載■ご当地アルプス登山案内 38 加美アルプス

関西支部 重廣恒夫

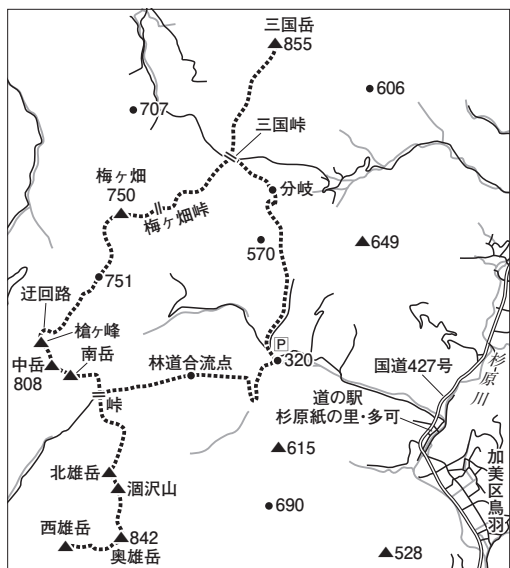
ご当地アルプスは全国各地に点在するが、兵庫県は特にその数が多い。孤高の登山家として知られる加藤文太郎が、生誕地に近い兵庫県と鳥取県および岡山県との県境の山脈を「兵庫アルプス」と呼び、兵庫槍（氷ノ山）など9座の山名を付けて、本場のアルプス同様に跋涉している『単独行 加藤文太郎遺稿集』でその詳細を見ることができる。

倉山」「兵庫中央アルプス」藤無山「黒尾山」「兵庫南アルプス」笠杉山「雪彦山」「兵庫東アルプス」三国岳「笠形山」とそれぞれ名付けられており、兵庫東アルプスは「加美アルプス」とも呼ばれ、登山者に親しまれている。

加美アルプスの最高峰は三国岳（855m）で、丹波、但馬、播磨の境にあり、丹波では栗鹿山（962m）に次ぐ第2の高峰である。麓

最近では南北に連なる山並みが、「兵庫北アルプス」扇ノ山、日名

には、1300年の歴史と伝統を持つ兵庫県の重要無形文化財・伝統的工芸品に指定されている和紙である杉原紙の生産を行なう研究所や、天戸間見命と大歳御祖命を祀る青玉神社がある。境内には樹齢600～1000年と言われる県指定天然記念物の杉林があり、神秘的な雰囲気をもも出ししている。また、出発点となる道



の駅「杉原紙の里・多可」の物産館は「かみ高地（加美高地・紙高地）」という看板を掲げているが、本場北アルプスの上高地になぞらえて付けられたもの。

山名も北アルプスの峰を模したもので、槍ヶ峰（槍ヶ岳）・涸沢山（涸沢岳）・奥雄岳（奥穂高岳）・北雄岳（北穂高岳）・西雄岳（西穂高岳）と名付けられており、雪を冠った時期は、確かにアルプスの景観を見せている。

なお、麓の多可町は日本一の酒造り好適米「山田錦」発祥の地だ。

【コースガイド】

道の駅から青玉神社を左に見て



西雄岳付近から振り返り見た表銀座の山並み

10分ほど歩いた登山口に駐車場がある。さらに進むと橋の手前にも車数台が止められるスペースがある。右手に三国岳への道標があるが、途中で林道が2つに分かれるので注意したい。右の林道に入り七合目（登山口が九合目で頂上近くが一合目）から沢筋に入り、途中、大玉林道への分岐を経て三国峠に到着する。峠からは緩やかな斜面となり、途中で林道2本を横切つて山頂（二等三角点・三国岳）に着くが、植林地のため展望は少なく、これから向かう各峰も見通せない。

往路を引き返し槍ヶ峰に向かう。三国峠にあった山名板（表銀座）の「がきだけ（三の峰）」つばくろ（六の峰）へおてんしょう」に向けて樹林帯の尾根筋を南下する。尾根筋の細い踏み跡と朽ちかけた道標頼りの登り降りを繰り返すが、常にコンパスで方向を確認し、ルートを逸脱しないように注意したい。つばくろ（四等三角点・梅ヶ畑、750m）から南下し槍ヶ峰（846m）への激しい登りとなるが、雨や雪などの日には右手（北側）から迂回するコースを登る方が安全である。

槍ヶ峰から中岳（四等三角点・貝坂、808m）を経て南東の尾根（南西の尾根に入り込まないように）上の南岳を通過して、地図に東西の破線（徒歩道）がある峠（多可町と神河町を結ぶ）に降り立つ。峠から少し登り、縦走路を南下して北雄岳（800m）に向かう（分岐の道標には10mと書いてあるが、40mくらいある）。

縦走路に戻りさらに南下。加美アルプスはいずれのピークも縦走路を含めて展望は少ないが、涸沢山（790m）を経て奥雄岳（四等三角点・小屋ヶ谷、842m）から西雄岳（850m）を結ぶ稜線は、北に三国岳と槍ヶ峰、南に千ヶ峰に至る稜線を垣間見られるし、シヤクナゲや岩尾根もあり、アルプス気分が味わえる。西雄岳からはまたに山を経て千ヶ峰方面に縦走もできるが、ここでは往路を峠まで引き返す。

峠からは真東に下るが、地形図の徒歩道は植林地の間伐木と枝葉で覆い隠され、消失している。急斜面を足場に注意しながら下ることになるので、方角を確認しながら慎重に下りたい。1時間半ほどで林道終点に降り立ち、ほどんど

スタート地点の三国岳登山口に帰ることができる。

【コースタイム】 道の駅（20分）標高320駐停車場（1時間）三国峠（30分）三国岳（25分）三国峠（40分）梅ヶ畑（50分）槍ヶ峰（20分）峠（20分）北雄岳（30分）西雄岳（40分）峠（1時間30分）駐停車場（20分）道の駅

【交通アクセス】 JR加古川線・西脇市駅から神姫バス「鳥羽上」または「杉原紙の里」行きがあるが、本数は少ないので、マイカーの使用が便利。

【参考文献・地図】 『改訂 新日本山岳誌』（日本山岳会編著、ナカニシヤ出版） 国土地理院2万5000分の1地形図「大名草」



本場上高地になぞらえて名付けられた物産館「かみ高地」

東西南北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

李仁禎・アジア山岳連盟 会長ご一行が来日

神崎忠男

6月1日、李仁禎・アジア山岳連盟会長、裴京美・同事務局長、鄭基範・元韓国山岳会会長のご一行が突然、韓国から来日した。

今回は個人的な来日で、「何しに日本へ来ましたか」と尋ねても、「日本の山仲間に出会いたくて来ました」と分かったような分からないような理由だった。コロナ禍でアジア山岳連盟の活動も低調となり、交流活動も途絶えぎみななかで、活性化活動の一つとしての来日とも受け止めた。それにしても、6月1日の午後羽田空港に来て、2日は東京に滞在したもの、3日の午前中には次の訪問地、台湾へ飛んでいった。お迎えする方は2日の1日だけ。宿泊したアルカ

ディア市ヶ谷のレストランで昼食に併せ歓迎交流食事を用意した。この日は東京も大雨。それでも古野淳・日本山岳会会長、坂井広志、橋本しをり両副会長はじめ、李仁禎会長がお会いしたいとリクエストがあった、故植村直己会員の公子夫人、故田部井淳子会員の公子夫人、進也氏、さらに以前から親交が深かった伊丹紹泰、笹生博夫両氏。また、来年、アジア山岳連盟創立30周年記念行事が日本で開催されるに当たり、アジア山岳連盟の関係者とお会いしていただきたい方が良いかと思っていた桐生恒治、数見直、杉崎敬子、石井秀則の各日本山岳会会員に、アジア山岳連盟加盟団体である日本勤労者山岳連盟から川嶋高志・常任委員と川嶋英子・国際委員が出席、世話役の今田明子、神崎忠男会員が食事に同席し、和やかな雰囲気度で食事が開かれた。

食事を終えても雨はやむことがなく、外出が困難。たまたま日本山岳会のルームが近かったので、ルームに移動していただいた。李仁禎会長は会員番号12701番の日本山岳会会員でもある。ただ、コロナ禍のためということもあり、年会費を5年間滞納されていた。連絡は取れていたもので、外国人会員ということで「3年末納付退会」を特別にお願いしており、滞納会費5年分を一度に納めていただいていた。5年分の会費はそれなり高額。それでも「日本山岳会の会費を納めに来日しました……」と笑顔で冗談を言いながら一件落着きといったところ。李仁禎会長から多くの日本の山仲間と会いたいという意向を受けたが、突然の来日ゆえに、身近なアルピニズムクラブ（同好会）や東京多摩支部・山の歌を歌う会など連絡の取れる会員に声を掛けさせていただき、2日の夜は、日本山岳会に近い西安飯店でラフな歓迎交流会を開いた。

昼食会から古野会長にはご出席いただき、石井秀典、今田明子、寛邦男、神崎忠男、坂上光恵、高原三平、竹中彰、高橋清輝、辻橋明子、富澤克禮、原満紀、廣田博、藤井正彦、前田文彦、本木總子、渡辺温子、和田誠一の各会員が大雨のなか出席していただき、お酒が進むにつれて交流の輪が広まった。閉会後はともに帰れるかどうかというほどの大雨。「韓国から雨を連れてきてしまった」と冗談を言いながらお開きとなった。

アジア山岳連盟は、1994年11月4日に韓国・仁川での設立総会で発足。当時の日本山岳協会・斎藤一男会長が初代アジア山岳連盟会長に就任。ドラマチックな出発となったが、来年2024年には創立30周年を迎える。東は日本、西はイランまで二十数ヶ国が加盟する。ただ、スポーツ・クライミングがオリンピック競技になったこともあり、ヒマラヤ登山などの経験や実績がなく、スポーツ・クライミングだけの加盟国もあり、運営に難しさを抱えている。昨年の周年記念事業の日本開催が決まったが、今回、そんな心配事も抱えて、李仁禎会長ご一行が来日されたのかもしれない。国際交流が重要な時期に、来た人、迎えた人たちに深く感謝し、心から御礼申し上げます。（アジア山岳連盟顧問）

サラリーマン女性の アコンカグア10日間登頂記

石川千嘉

11月にエクアドルのチンボラソを登った後(「山」1・2月号掲載)、目標をアコンカグアに定めた。アコンカグアのツアーは通常3週間程度の期間での企画となり、普通の会社員には難しい。しかし、チンボラソ登山をお願いしたエクアドルのガイドが、10日の日程で引き受けてくれることとなった。

エクアドルのガイドとリマで落ち合い、入り口の街となるアルゼンチンはメンドーサに入った。初日は入山許可証取得の手続きを済ませ、大きくおいしいステーキを食べながらワインをたらふく飲んで、翌日以降の登山に備える。車で麓の山小屋であるペニテンテスに入り、ベースキャンプまで運んでもらう荷物を預け1泊した後、さらに車で登山口に移動し、入山許可証を提出して排泄物処理のためのビニール袋を受け取る。ここから登山がスタートする。

初日は正午に出発し、最初の宿泊地コンフルエンシア(3400m)には15時に到着。翌朝、血圧と

SPO2の計測があるが問題なく通過、2日目には距離は長いものの雄大な風景を眺めながらのハイキングで、BCのプラザ・デ・ムラス(4300m)に到着。本来の予定では、ここからC1(5150m)、C2(5550m)、C3(5950m)と標高を上げ、C3からサミットプッシュ、という予定だった。しかし、BCには最低2日留まるのが最近必須となったようで、2日目に健康診断があるという。ここで予備日1日を失うが、この拘束日を活かしてC1まで荷物を上げてしまうことにした。

健康診断も無事に通過し、いよいよ山頂に向けて歩を進めていく。BCで予備日を1日失ったため、C3には泊まらず、C2からサミットプッシュという日程に変えることにした。

5日目。緯度が高く夜9時くらいまで行動できるため、日が昇り寒さが緩む10時30分にC1を出発する。荷物が25kg以上あるため、かなりきつい。C2に到着後、まず飲料水にするための水を30分ほど歩いた池に取りに行く。レンジャーステーションに天気予報を聞きに行ったガイドの顔が浮かない。

聞くと、明日は危険な風の予報で、サミットプッシュには適さない、さらにその風は2日続き、3日後までチャンスがないという。我々は、標高が高くて十分に体が休まらないC2に留まるより、一度BCに戻ろうという判断をした。

8日目。天気予報をチェックすると、本来チャンスがあったはずの明日以降は強風の予報に変わり、唯一のチャンスは2日後。それ以降は吹雪になるという。しかし、それは帰国便の飛ぶ日である。ここまで来たからには、帰国便を変えてでも登頂を目指すか？

我々は熟考の末、本来チャンスがあったはずの明日に賭けることにした。すでに時は昼。そして、高低差2700mをここから一気に登る。そういう決断であった。C2にほとんどの荷物は置いてあるため、できるだけ早くC2まで登り、仮眠を取り、深夜からサミットプッシュ、という作戦だった。昼過ぎにBCを出発。夕刻C2に着いた。強風で倒壊しているテントがある中で、我々のテントは無事だった。水を取りに行き、食事をとる。登頂用の荷物を作り、20時に就寝して強い風の中、3時間の

仮眠をとる。しかし、バタつくテントの中で、登頂をあきらめざるを得ないかと気をもみながら、まんじりともしなかった。

深夜12時ちょうどにテントを出発する。靴を履いた瞬間、奇跡のように風がやんだ。山の神様が、山頂への門を開けてくれた。6500m付近までは順調に登る。それ以降がきつい。ひたすら我慢を続け、昼12時、山頂を踏んだ。その後、風が始めた。写真を撮っただけで感慨に浸ることもなく、さっさと下山を開始する。

10日目。C2からBCまで戻り、すでに日程が押していたため、急遽ヘリをチャーターして麓のコンフルエンシアまで戻った。2日掛けて歩いた道が10分程度の飛行で戻ってしまい、あまり感傷にふける間もなかったが、それはそれで日程を十分に活かされたため、良かったと思う。

こうして、中年女性、フルタイムのサラリーマンでも、アコンカグア登頂ができた。次の目標はマナスルである。なんとかして、肉体的・金銭的その他準備を整えて、実現したいと思う。

(会員番号17066)

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

科学委員会

賤ヶ岳、伊吹山 探索山行報告

6月10日(土)～11日(日)の2日間、科学委員会主催の探索山行を開催した。委員会メンバー15名のほかに一般参加者24名の総勢39名だったが、この中に京都・滋賀支部から3名、東九州支部から1名の参加もあり、互いの交流を図ることもできた。

6月10日、10時に米原駅に参加者が集合し、貸切バスで木ノ本へ。途次、樹木医であり森林インストラクターでもある石井委員・講師から事前に採集された琵琶湖周辺の植物の解説があった。賤ヶ岳リフト乗り場からリフトを利用する。賤ヶ岳途中までのリフト鉄柱には加藤清正をはじめとする秀吉軍の賤ヶ岳七本槍の名前が記載されていた。頂上には戦跡碑や戦没者の

碑とともに、折れた槍を肩に項垂る柴田勝家の像が印象的だった。昼食をとり、琵琶湖、竹生島や余呉湖を眺めながら戦国の世の羽柴秀吉と柴田勝家の戦いを偲んだ。

下山し、伊吹山文化資料館の館内見学後、米原市教育委員会の学芸員の方から伊吹山全般のご紹介をいただき、『NHK朝ドラ』「らんま」のモデル牧野富太郎が対山館を定宿として何度も伊吹山を訪れ、多くの植物に学名を付けたことをお聞きした。続いて石井講師から伊吹山の成因や地理的特性、さらに歴史的文化的特性などを理由とする植生の特徴の解説や鹿の食害による絶滅危惧種の解説をしていただいた。

6月11日は朝から雨、参加者の平均年齢が70歳を超えているものの登山道が整備されており、リスクも少ないとして予定どおり決行を判断し、貸切バスで伊吹山スカ

イライン駐車場へ向かった。全員雨具を着て西登山道經由登山開始。途中で石井講師から生育している樹木や草花などの解説をしていたのだが、グンナイフロ、クサタチバナ、オドリコソウ、イブキシモツケ、ミヤマコアザミなどの花が雨の中でも健気に咲いていた。山頂では風雨が強かったので当初予定していた植生観察および昼食

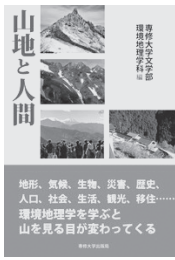
を中止、早めに中央登山道より下山した。帰途、間近に美しい鳴き声のホオジロに出会うことができた。スカイライン駐車場バス内で昼食をとり、帰路に日本に5つしかない国宝天守を持つ彦根城を見学。15時半に米原駅で解散となった。石井委員・講師には2日間にわたるご丁寧な解説をいただき、ありがとうございます。(伊藤謙二)



図書紹介

山地と人間

専修大学文学部
環境地理学科編



2023年4月
専修大学出版局
四六判 268頁
2400円＋税

日本の山地の自然と、山と人の関わりを、専修大学環境地理学科の教員が分担執筆した山地の地理

概説書である。地理学は大きく自然地理学と人文地理学に分かれるが、本書は前半が自然地理、後半が人文地理分野のテーマになっている。章題には「なぜ」「どのように」など読者を誘う疑問符が付されているが、ここでは主題のみ「」で示して内容を紹介したい。

第一章は「山の地形」で、地殻変動と火山活動によって生まれた山地が、様々な姿に変わっていく過程が、岩石の風化、川や氷河の侵蝕、斜面の崩壊や地滑りなどの諸作用の働きに重点を置いて説明される。山地は各地の気候に大きな影響を及ぼすほか、山風・谷風、フエーンなどの局地風を発生させる。第二章「山の気候」では、そのような山地特有の気候・気象がなぜ生まれるのか解説される。

第三章「山の動植物」では、高さと異なる山の生物分布と景観が、身近な里山に焦点を当てて解説され、シカの食害、ナラ枯れ、雑木林に侵入するモウソウチクの猛威なども人の営みに関わりのあることが、平易に述べられている。

第四章「山地の災害」では、日本は斜面崩壊や土石流などの土砂災害の世界的な多発地であることが指摘され、土砂災害の原因と過去の事例を挙げてどのような所が危険か解説される。そして、被害を避けるには地形条件の理解を深めて、危険が予想されるような場所を利用しないことが重要、と注意を喚起している。

後半は山と人の関わりが時代順に記述される。第五章は「荘園図に見る山の表現」で、古代の荘園図には平地に東西南北1町ごとの方格線が引かれ、周囲の山は山麓線と稜線のための単純な線で描かれているが、時代が下ると図に寺社や家加わり山には樹が描かれるようになったことが図で示される。時代とともに地図作成の目的が変わったのだろうか。第六章では前章の時代から明治初年の地租改正まで千数百年間の「林野制度、資源利用、山地住民の歴史」が述べられる。

第七章「山村の人口変化」では、過去100年間の山間町村の人口動態が国勢調査データに基づき解説。役場所在地の標高300m以上の町村を山村として、北海道を除く8地方の5年ごとの人口変動と高齢者人口の比率の推移が図示され、高度経済成長期の急激な人口流出のパターンに地域差があることを指摘して原因を考察している。

第八章は「登山の歴史と山の観光」で、信仰登山からスポーツ登山の発展、その後の山登りとスキーの大衆化、山の観光地化に至る山のレジャー変遷史が述べられる。登山史の部分は省くが、後半では山の大衆化、観光地化の過程が時代背景とデータを示して平明に説明されている。時代を共有する読者には興味深いであろう。最後の章は「山間町村への移住問題」で、

山間部からの急激な人口流出が問題化して以降の国の地域政策、地方自治体の移住・定住支援策、移住者の3つの側面からこの問題を考察している。

以上、山の自然の「なぜ」、人と山が「どのように」関わってきたかを知り、私考を巡らす楽しみも感じられる一冊である。(小嶋 尚)

山と溪谷社編

アウトドア六法



2023年3月
山と溪谷社 127頁
A5判 1800円＋税

登山をはじめとする「アウトドアアクティビティ」は、一見すると日常から解放されて、なんでも自由にできるように思われがちだが実際には我が国においては、多くの法令および都道府県、市町村の条例が定められている。それに気づかないで、悪気なくやってしまったことが、実は重大な法令違反になってしまいうことも大いにあり得ることである。本書は、山、川、湖沼、海、都市近郊公園で行なう

アウトドアアクティビティに関連する法律について、Q&A方式で分かりやすく解説している。

本書は、第1章から第6章までの6つの章から構成されており、第1章がアウトドアアクティビティに関わる法律や条例、第2章が山で行なうアクティビティ、第3章が川や湖沼で行なうアクティビティ、第4章が海で行なうアクティビティ、第5章が都市近郊公園で行なうアクティビティ、そして第6章がアクティビティ中の事故に関わる法律について取り上げている。各章とも、関連する法令は多岐にわたり、重大な法令違反になるもの、厳密には法令違反だが、現実的には黙認されているもの、注意を要するもの、現在、法律による規制はないが、マナーとして守るべきものなど、様々なレベルのものが紹介されている。また、現在法律による規制がなくても、マナーが悪いと新たに法律や条例が制定される可能性があることを指摘している。直接的に登山と関わりのあるものは第2章と第6章の一部だが、登山をしていれば、付随的に川や湖沼を訪れることもあるので、ひと通り目を通しておく

ことをお勧めしたい。

登山と直接関係する内容では、テントの設営場所の問題、登山届の提出義務、ハイキング中に見つけた木の実や動物の骨などの採集、クライミング、焚き火の場所、お花摘みや雉打ちなどの屋外での排泄行為、ナイフの持ち歩き、スキ場でのゲレンデ外を滑る行為……などを取り上げており、法律で規制されているもの、条例で定められているもの、ローカルルールがあるものなどに分けて丁寧に説明されている。また、ローカルルールについては、境界線をまたぐと一変する場合もあるので、注意が必要であること、インターネットを活用して事前に最新の情報を調べることを推奨している。普段、何気なくやってしまっていることの

数々が実は注意を要するものであったりするので、読んでいて気が引き締まる思いがする。

また、ネット検索と本書の併用の助けになるように、検索キーワードの例を表記しており、ネット検索に不慣れな世代の方に親切な構成になっている。ネット検索を推奨している背景としては、特に都道府県や市町村が定めている条例やその地域のローカルルールについては多様で、個別に調べておかないと知らず知らずのうちに違反してしまうことがあり、注意する必要があるからだろう。法令遵守をしっかり意識した上で、思い切って登山をはじめとするアクティビティを楽しむために、ぜひ手に取っていただきたい一冊である。(床田真理)



令和5年度第4回(6月度)理事会
議事録

日時 令和5年6月14日(水曜日)
19時00分～21時30分

場所 Z o o m (オンライン) ル

1 ム

【出席者】古野会長、山本・坂井・

橋本各副会長、柏・南久松・

萩原各常務理事、松原・松

田・清水・飯田・平川・川

瀬・久保田・長島各理事、佐

野・黒川監事

【欠席者】なし

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・2024年全国支部懇談会の

開催について神奈川支部へ依頼し

たことを承認した。(坂井)(賛成

15反対0)

2・支部山岳祭補助金申請(藤木

祭)について承認した(坂井)(賛

成15反対0)

3・越後支部支部長交代について

承認した。(柏)(賛成15反対0)

4・子どもと登山委員会の委員長

交代について承認した。(飯田)

(賛成15反対0)

【協議事項】

1・東京新支部構想について、今

後の進め方について協議した。

(坂井)

【報告事項】

1・正会員16名、準会員6名の入

会承認報告があった。(古野)

2・寄附金および助成金15件の受

入れの報告があった。(南久松)

3・104号室のMEETを導入決

定について報告があった。(柏)

4・6月8日、リモートにて支部

連絡会議を実施したことについて

報告があった。(柏)

5・事務局員交代に当たり職務内

容の報告があった。(柏)

6・田村職員の退職金について報

告があった。(南久松)

7・退職した田村元職員の図書室

整理作業の協力について報告があ

った。(柏)

8・ルーム利用要領の改訂につい

て報告があった。(柏)

9・創立120周年記念事業募金

の現状報告があった。(柏)

10・内閣府への令和4年度報告に

ついて報告があった。(柏)

【その他】

1・「山」6月号発行について報告

があった。(節田)

2・総会スケジュールについて確

認した。(柏)

ルーム日誌 6月

1日 YOUTH CLUB委員

会 山岳地理クラブ

6日 スケッチクラブ

7日 山行委員会 記念事業委員

会(山岳古道調査)

8日 財務改善部会 九五会

9日 図書委員会

12日 かつぱの会

13日 総務委員会 アルピニズム

クラブ

14日 理事会 休山会 山想クラブ

15日 科学委員会 山遊会

16日 自然保護委員会 みちのり

山の会

17日 記念事業委員会(エクアド

ル登山隊) アルピニズム

クラブ

19日 資料映像委員会

20日 会報編集委員会 麗山会

21日 沢登り同好会Ⅱ

財務改善部会 YOUTH

CLUB委員会 三水会

22日 つくも会

公益法人運営委員会 Y O

UTH CLUB委員会

(学生部)

26日 緑爽会

27日 支部事業委員会 00会

28日 子どもと登山委員会

29日 記念事業委員会(グレート・

ヒマラヤ・トラバース)

30日 記念事業委員会

6月来室者 245名

会員異動

物故

小森恵己子(4762) 22・12・20

松田順次(5484) 22・6・1

田中 清(9699) 23・1・7

小林隆志(10356) 23・5・26

吉川隆士(10930) 23・3・12

高橋満男(13460) 23・5・24

稲原 明(14072) 23・3・18

渡辺 隆(15718) 23・5・17

人見茂子(16731) 23・6・3

退会

坂本観晃(6872)

明学山岳会(9300)

金田博秋(9906) 東海

石井由紀(12376)

平野幹雄(12578)

平野 和(12579)

橋場克司(12839) 静岡

金田記代子(14043) 東海

榎間清子(15255) 東海

小林英世(15834)

木村桂子(16149) 東海

横井公亨(16484) 東海

木下好恵(16684) 福井
藤原義弘(16726)

小壁正義(A0333) 関西



◆山行委員会新企画—会員の宿を訪れる山旅シリーズ【その2】

尾瀬・原の小屋 山行委員会

第2回は、紅葉と草紅葉の静かな尾瀬ヶ原・見晴で山と溪谷社経営の原の小屋です。管理人は高妻潤一郎さん。TVや小説などにも登場する名管理人です。

日程 9月26日(火)〜27日(水)

集合 26日(火)12時 鳩待峠休憩所前

行程 鳩待峠―山ノ鼻―尾瀬ヶ原―見晴(泊)―尾瀬沼―三平峠―大清水(解散)

参加費 1万3000円

定員 8名

申込み先 高橋努 ☎090-2906-4456

06-4456 59 ☒sanko@jac.or.jp

*保険加入のため生年月日をお知らせください。

インフォメーション

お知らせ。

*詳細は参加申込み者にご案内します。企画に合う宿があれば、山行委員会までご提案ください。

◆2023年度 自然保護全国集会—人と森のかかわり—

自然保護委員会／高尾の森づくりの会共催

日時 10月21日(土)〜22日(日)

会場・宿泊 タカオネ(八王子市高尾町)

内容 21日・哲学者・内山節氏による基調講演、支部報告、懇親会 22日・高尾の森づくりの会フィールド見学

費用 1万8000円(講演費用、相部屋での宿泊費、懇親会、22日の朝食・弁当、保険代)

申込み 9月1日(金)までに、支部

申込み 9月1日(金)までに、支部

名・参加者名・住所・電話番号、21日の懇親会参加の有無、宿泊の有無を明記のうえハガキ・Fax・メールのいずれかで左記へお申込みください。参加費は当日、受付で。
〒102-0081 東京都千代田区四番町5-4
日本山岳会 Fax 03-3261-4441 ☒jac-sizenhogo_shasin@jac.or.jp

◆山岳写真展「心に残る槍穂高」

高橋秀夫

会期 9月9日(土)〜9月28日(木)

ただし11、19、25日は休館 9〜17時(入館は16時30分まで。最終日は14時まで)

会場 北アルプス展望美術館(池田町立美術館)、安曇野ギャラリー 長野県北安曇郡池田町大字愛染7782

アクセス 長野自動車道安曇野ICより車で約20分 JR大糸線・穂高駅よりタクシーで約15分 同・安曇追分駅よりタクシーで約6分

◆編集後記◆

●今月は奥飛驒・神岡に行つてきました。今は山を降りていますが、穂高岳山荘の二代目オーナー・今田英雄さんの評伝『穂高に遊ぶ』(谷山宏典著、山と溪谷社)発刊と、同山荘創業百周年のお祝いのため松本から往復しました。

●120年の歴史を誇る日本山岳会で、ついに女性会長が誕生しました。橋本しをり新会長には、フレッシュな女性目線ぜひJACを活性化させていただきたい、と期待しております。穂高岳山荘の三代目社長も、今田さんの娘の恵さん。そのほか朝日小屋や蝶ヶ岳ヒュッテなどでも女性オーナーが活躍していますし、山ガールも一過性のブームではなくしつかり根付き、山でも女性のパワーを感じます。頑張れ山ボーイ!(節田重節)

日本山岳会会報 山 938号

2023年(令和5年)7月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重節
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社